

「考えさせられる」葬儀(二)

葬儀をめぐる現状(社会問題としての葬儀 前編)

浄土真宗本願寺派総合研究所

【研究所の葬儀研究】

浄土真宗本願寺派総合研究所では、「葬儀」について多角的な視点から調査・分析を行っている。葬儀については、執行者である僧侶以外に、社会やメディアなどからさまざまな声が発信されている。しかしながら、一人ひとりの僧侶が葬儀という現場に関わりを持ちながらも、そうした社会や専門家、他の僧侶の直接的あるいは客観的な声に接する機会が少ない。そこで、総合研究所では、葬儀の現状を考えるにあたり、

- ①HPや書籍など、各種メディアから発信されている声
- ②社会にあるさまざまな声
- ③葬儀現場に従事している専門家の声
- ④僧侶の声

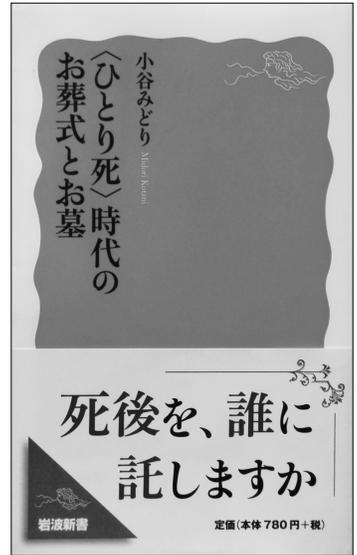
を収集し、多角的に検証を行い、現代社会における僧侶や寺院のあるべき姿を模索している。

前回(『宗報』5月号)は、①各メディアから発信されている声について、主にHP上に掲載されている「葬儀」に関するQ&Aの分析結果を報告した。

今号では、②社会にあるさまざまな声について、研究所で2018年3月に開催した研究会をもとに報告を行う。③、④は本年度の研究課題として、今後調査分析をしていく予定である。

【今回の趣向】

僧侶は、葬儀の現場に行く機会が多々ある。しかし、寺院



とその周辺に活動範囲が限定されるため、現在の日本社会全体で起こっている葬儀や墓の現状については、総合的に理解できていないのが実情である。そこで、現代の葬儀事情や墓の問題を専門とする小谷みどり氏（本願寺派総合研究所委託研究員、第一生命経済研究所主席研究員）を研究会の講師としてお招きし、近著『〈ひとり死〉時代のお葬式とお墓』（岩波新書、2017年、以下、本書と示す）を題材とし、藤丸智雄（総合研究所副所長）との対談を行った。対談では、葬儀の現状の背景や課題、それらにどう対峙^{たじ}していくのかを、本書の章立てをもとに議論した。本書の構成は以下のとおりである。

タイトル…『〈ひとり死〉時代のお葬式とお墓』

（岩波新書、2017年）

序 章 社会が変われば死も変わる

高齢社会がもたらしたこと／終活ブームなのか／

「家族」が変わった など

第1章 何が起きているのか

お葬式の告別式化／宗教とお葬式／お墓は足りないのか など

第2章 お葬式は、どうなるのか

葬儀社頼みのお葬式／お布施／お葬式は、どうなるのか など

第3章 お墓は、どうなるのか

お墓と納骨堂の違い／お墓の引越し、改葬／なぜお墓を建てるのか など

第4章 〈ひとり死〉時代で葬送はどこへ

家族の限界／生涯未婚者が後期高齢者に／誰もが「ひとり」 など

第5章 誰に死後を託すのか

迷惑をかけたくない／死とは何か／人と人とのつながりのなかで など

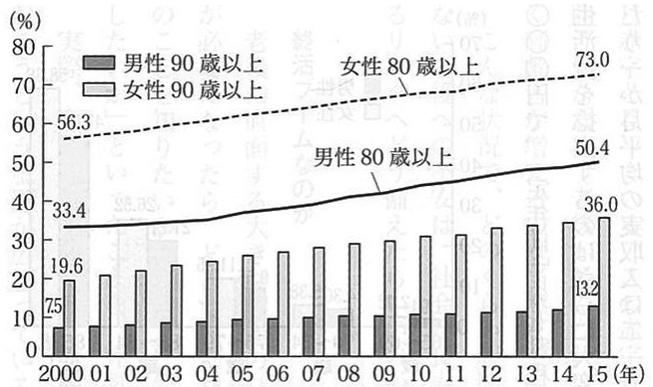
研究会では、本書の構成をもとにして、藤丸副所長の質問の後、小谷氏の応答という形で進行し、参加者（総合研究所研究員）も交えながら議論を行った。以下、各章に基づき、今回は序章から第2章までの対談内容を報告する（第3章～第5章までの内容は次号に掲載予定）。

序章 社会が変われば死も変わる

急激な変化はなぜ起きたのか

藤丸・僧侶は、それぞれのお寺において葬儀の現場に関わっているが、葬儀には地域差が大きく、葬儀の変化について総合的に理解するのがなかなか難しい面がある。『宗報』5月号では、ウェブ上での葬儀に関する現状を紹介した。小谷先生は、長年にわたり葬儀に関する分析を行い、さまざまな提言をされている。本書の「序章」では、高齢化・家族構成の変化、それに関して経済的な問題を背景として、多様に変化している葬儀のいまが詳細に分析されている。私たち僧侶は、現在の葬儀の変化のスピードにとまどっている面があるが、この状況について感じていることを教えて欲しい。

小谷：私は研究を始めて25年になる。20年前、少なくとも今世紀になる以前を思い返すと、僧侶も葬儀社も「人が死んだら葬儀をする」ことは当たり前であったが、この10年ほどでこの当たり前がガラッと変わった。なぜこの変化を予測できなかったのかというと、世の中は価値観の異なる若い人によって変化していく。亡くなっていく人と世の中を変える人が違うということに気づいていなかったために予想ができていなかった。ここ10年で戦前・戦後の時代とは異なった価値観を持つ人が葬儀に関わるようになり、変化が生じたと言える。



出典：厚生労働省「人口動態統計」(各年次)

図序-1 80歳以上、90歳以上で亡くなった人の割合

者が多い。しかし高齢化が進むと、子どもたちも現役世代でなくなるから、葬儀の参列者が少なくなるのは当たり前前の現象だ。僧侶は葬儀がされなくなってきたこと、急激に参列者が減っていることの実感を持っているものの、その理由がわからない方が多いと思われるが、それは、統計から見れば明確である。1980年代に「核家族化」が言われたが、それは若い世代（現役世代）の家族のことだった。しかし、ここ20年くらいは高齢者が「核家族化」している。このことが葬儀に影響を及ぼしている。

亡くなっていく人の年代も大きく変化した。80歳以上で亡くなった人の割合を見ると、2000年までは女性33%、男性56%の割合だったが、2015年には女性73%、男性50%と全体的に増えている（本書3頁 図序1-1）。亡くなった人の子どもが現役世代だと、当然、参列

終活は死を考える契機になったか

藤丸…終活は意外と進んでいないことが指摘されている（本書6頁）が、「終活」については、先生の中でも、予想に反して進んでいないと感じているのか。

小谷…世の中の人は、「死」について考えるようになったかというところ、全然考えていない。「延命」とか「脳死」などの問題はリアルすぎて考えるのが辛くなってしまうのだが、自分の葬儀や墓については気楽に考えられる面がある。それが昨今の終活事情。しかも、真剣に深く葬儀や墓について考えているわけではない。単純に「お金をかけたくない」と思っているだけ。理想的な自分の葬儀について考えている人は極めてまれである。もし理想的な葬儀の形のようなものを一般の人が求めていると問題設定すると、的外れになる。「終活ブーム」は幻想であるというのが私の説だが、あったとしても既に終わっている。なぜ一過性のもので定着しなかったかと言えば、多くの人が「死」に関心を持っていないから。しかし、「死」について考えることは、自分がどう生きるかを考えることに繋がることなので、重要なことだと考えている。

藤丸…仏教は、釈尊が「諸行無常」を説き、「死」が必ず訪れることを根底において、われわれのあるべき姿が教示された。終活を「死をきちんと考えること」「死を見つめつつ今をどう生きるかを考えるもの」として捉え、僧侶から発信していくことは重要だろう。

第1章 何がおきているのか

僧侶がいる「意義」が伝わっているか

藤丸…葬儀がどんな儀式かについて一般の方々に調査を行った結果、一番多い回答が「故人とお別れする儀式」（68・5%）と指摘されている（本書25頁）。つまり、世間では、葬儀や「死」は宗教性と関わりを持って捉えている人が少ないように感じられるが、この数値は、どのように読み解けばよいのか。

小谷…そこは僧侶が頑張らなくてはならないところ。例えば、一般の方々は、死後、「西方浄土に行く」という実感がない。僧侶を葬儀に呼んでいるのは、慣習として成立しているだけで、（宗教者としての僧侶）に求めてもらう意義を理解して依頼しているわけではない。慣習は時代によって変わるものだから、意義が理解されないと、僧侶を呼ぶ必要がなくなってしまう。見栄や世間体がなくなったことが影響していると言える。

藤丸…そうすると、普段（生前）から、西方浄土の話の聞いて、僧侶を呼ぶ意義を感じてもらうことが必要ということになる。

小谷…ただ、定着していないのに、いきなり「西方浄土の話をお願いします」では聞きに来ないだろう。例えば、お寺で終活講座を開催し浄土の話をしてはどうか。今月は「死んだらどこに行く

のか？」をテーマにし、来月は「葬儀でお勤めしているお経の内容は？」をテーマにする。こう考えると、僧侶が発信できる「終活」は豊富にあるのではないか。

第2章 お葬式は、どうなるのか

通夜はなぜ消えていつているのか

藤丸…我々僧侶にとつての重要な変化の一つとして、ワンデーセレモニーの都会での普及が挙げられる(本書63頁)。しかし、地方ではまだ実感が無い。通夜がなくなっていく現象について、どのように考えられているのか。

小谷…長野県のある村に講演に行った時、ワンデーセレモニーが普及していると聞いた。だから都会ばかりとは限らない。かつては葬儀や通夜に訪れる参列者は異なっていたが、今は家族だけで行う形式が多い。すると、同じ顔ぶれなので、同じことを二回やるのはおかしいと思うようになってきている。一日で終わらせようという簡素化の原因の一つがここにある。

また、ワンデーセレモニーだと会場費も半分になる。さらに親族の経費がかからないという声をよく聞く。負担の大きい宿泊費を安くできるし、宿泊の困難な高齢者にとっても都合が良い。

藤丸…ここで参加者からも聞いてみよう。「通夜」を行う意義についてどう考えるか。

参加者A…葬儀は時間が限定されているので、僧侶と遺族、遺族と参列者とのコミュニケーションが取れない。通夜では、それができるので通夜は必要だと思う。

参加者B…法話をゆっくりできるのは通夜。葬儀は時間が限定されるので、ゆっくり法話ができない。

参加者C…時間をかけることは悲しみを受容する上で大切ではないか。母親が亡くなった時には火葬場の事情で幾晩も家にはいられず、その時間はとても貴重だった。ご門徒からも、例えば、ご遺体に添い寝して、その時間が良かったという声を聞く。夜、ゆっくりと悲しみに向き合いながら時間を過ごすことが大切なことではないか。

小谷…皆さんのご意見を聞くと通夜が必要であるように感じる。一方で、葬儀はどのように必要と意味づけるのか。それぞれの宗教的意義を説明する必要があると感じる。ご遺体は二十四時間経過しないと荼毘に付すことができないので、必ず一晩を過ごす。直葬された方の中でも、一晩、ご遺体とゆっくりでき良かったと感想を述べる人が多い。そこに何故、宗教者が必要かということを考えないといけないのではないか。

藤丸…浄土真宗の葬送儀礼は、臨終勤行があり、通夜があり、葬場勤行があり、還骨勤行等があり、その後、七日ごとのお参りも一般的に行われている。このようにいくつものお勤めを行うのは、大切な方の「死」について時間をかけて対応してきたことの証でもある。しかし、現在は小規模化・簡素化の流

れが進んでおり、通夜と葬儀の会場が同じ場合も増えている。その背景には、長い時間をかけて葬儀やその前後の儀礼を行うことが、経済的にも肉体的にも負担となっていることがある。今一度、本当に大切なことを維持しつつ、遺族に負担がかからない形態とは何かについて問い直す必要があるように感じられる。

お布施の意味は伝わっているのか

藤丸…経済的な点で言えば、お布施ふせのこともよくメディアなどで取り上げられている（本書71頁）。普段からのお付き合いがないと、突如として起こる葬儀なので、お布施の意味をなかなか説明しきれない面がある。一般の方がたはお布施をどう捉えているのだろうか。

小谷…施主の中に、「なぜ高額な謝礼を貰ったのに、僧侶はありがたうと言わないのか」と僧侶に不満を持つ方が多くいる。それは対価だと思っているから。お布施の宗教的な意味を伝えるべきだと思う。お布施は対価ではないことを伝えることが重要である。お布施は財施ざいせだけでなく、法施ほうせ（仏の教えを聞く）・無畏施むゐせ（恐れなき心を施すこと）の意味もあるので、お寺の手伝いやお寺の行事への参加など、様々な形があるはずだ。そのことを伝えきれない僧侶の責任は重い。私は葬儀社の新人教育を依頼されることも多いので、そこではお布施の本来的な意味を伝えるようにしている。「お寺の清掃を手伝う」「お寺の法

要に協力する」こともお布施になるということを、葬儀社の方々に知ってもらうことも大切だ。僧侶も、それを実践してはどうか。

参加者A…最近では、僧侶派遣会社が、僧侶の活動について値段をつけるので、一層、対価のように受け取られやすくなっている。お布施のことをきちんと伝える必要が大きくなっているように思う。

参加者B…僧侶派遣会社では中間マージンが発生する。その分について施主は知らないケースが多く、金額が僧侶に手渡されていると思っている。このこともお布施が高いイメージに繋がっている。

小谷…普段からお寺とのお付き合いがない方は、お布施の意味も知りようがない。お布施は財施として仏さまにお供えするという意味を知らないで、僧侶を対象に対価としてお布施を渡しているのではないか。

それから、ダブルスタンダードになっていないだろうか。こういう場ではお布施は対価でない、いくらでも良いと聞くが、お布施の額についてお寺から文句を言われたということを遺族からよく聞く。このダブルスタンダードに、きちんと対応していないのではないか。

藤丸…かつてある地方で「この地域の慣例では葬儀のお布施は一万円。お寺と長いお付き合いをしていただき、その中でお寺にご協力いただいている」という話を聞いた。普段のお付き合い

いがない遺族が増加すると、葬儀で多額のお布施というのは常識的でないように感じられる。長いお付き合いの中で協力いただくという意識を僧侶側が持ち、葬儀に対応することも必要ではないか。

小谷…実はそれが難しい。多くの家業は、地域の人との長いお付き合いの中で成り立ってきたし、これからもそうであり続けるといふ幻想を抱いてきた。しかし、家族間の継承がされにくくなったため、もちつもたれつの関係ではなく、「お支払いただける時に多くいただく」という考え方に移行している。お寺の世界も、その難しさがあるのではないか。その方が亡くなれば、ご当家との付き合いも無くなるとすれば、長いお付き合いの中で協力いただくというわけにはいかなくなる。

藤丸…ご指摘の点は重要である。過疎地のお寺などでは、ある家で葬儀が出るとお寺を支えてくれる家が一軒なくなってしまうことを意味する。これは宗門にとっても深刻な問題である。お布施の問題、葬儀の問題は、一様には捉えられない難しい問題である。

前半 まとめ

小谷氏は、社会変化の主体である若者（現役世代）と、旧来の観念や慣習を持って亡くなっていく人々との差が、近年の葬儀の変化を生じさせていると分析された。この指摘は、葬送儀

礼の現況の背景を捉える上で重要な指摘である。

僧侶の発信力が足りないことについては、『宗報』2018年5月号「考えさせられる葬儀(一)」で報告したとおりだが、今回のお話から、僧侶は社会変化の実態を継続的に把握するところから始める必要性を感じた。その上で、①通夜の意味、②お布施の意味、③「生死」の意味の三点を、相手の状況に応じつつ伝えることの重要性が確認されたと思う。

次号では、墓を取り巻く諸問題をはじめ、これからの葬儀の形態、葬儀をめぐる人間関係など、本書の第3章〜第5章をふまえた対談内容を報告する予定である。

〈筆耕・構成〉那須公昭

富島信海

i 「お通夜をせず、葬儀・告別式、あるいは宗教的儀式の葬儀式もせず、身内だけの告別式をした後でそのまま火葬してしまふ」（本書63頁）形式。1日中通夜・葬儀が終わるので、「一日葬」などとも呼ばれる。